

# 琉球病院 Monthly



独立行政法人  
国立病院機構 琉球病院  
National Hospital Organization RYUKYU Hospital

Vol.86  
2020. March

発行者 琉球病院事務部長  
秋好 輝雪

## 基本理念 この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である

### アルコール地域従事者研修会を開催して

アルコール依存症治療病棟看護師長 長 祥子

当院でアルコール地域従事者研修会を開催しました。24名の方にご参加いただき、職種は保健師、法務教官、ケースワーカー、作業療法士など多岐にわたっていました。

前半は、アルコール依存症の概論、ケースワークや病棟での看護、家族支援などの講義でした。後半は、事例検討をグループワークで行い、最後に全体でディスカッションを行いました。事例検討は事前に募集していたものを改変させた内容で、家族が疎遠でサポート体制の構築が難しい事例、健康への動機付けが難しい事例などグループ毎に提示させていただきました。通常の業務であれば頭を悩ませる内容だと思えますが、多職種が集まっていることも影響してか『あれができるかもしれない』『これができるかもしれない』など、いろいろな考えがありました。皆さんの表情も生き生きしているように見えました。

最後のディスカッションの中で、地域でアルコール問題のある人をどう医療に繋げたいのかかわからないとの発言が印象的でした。先日、他医療機関にご挨拶に伺った際も、ご本人の治療の動機付けを行い専門医療に繋げることの困難感をお聞きしました。当院のアルコール依存症病棟にいられている患者様は、問題を有している方々の中のほんの少数なのだと改めて実感しました。



研修会の目的は地域の支援者向けのアルコール依存症理解と支援の啓発ではありましたが、地域連携の強化と家族支援のあり方を考える機会となりました。依存症関連の方々を医療に繋げるために当院からも出前講座の提供や事例検討会などの開催も検討していきたいと思えます。

### ● 地域医療連携室だより

琉球病院では、受診相談や地域、行政、他医療機関からの窓口として地域医療連携室を設置しております。

一般精神をはじめ、アルコール依存症（アディクション全般）、治療抵抗性統合失調症治療薬で効果のあるクロザピンによる治療、認知症、児童思春期外来といった様々な疾患をお受けできる診療体制を整えております。

また、中北部圏域を中心とした地域の皆様によりよい質の医療を提供し、適切な対応ができるよう充実した取り組みを行い、地域のニーズに応えられるよう日々努力していきたいと思っております。

初診をはじめ、受診については予約制で行っております。まずはお気軽に地域医療連携室までお問い合わせください。

※お問い合わせ先：地域連携室 098-968-2133 内) 231, 234

### 院長

ふくじ やすひで  
福治康秀



1964年生まれ、那覇市出身、首里高校卒。1993年琉球大学医学部卒、琉球大学医学部精神神経科入局。95年那覇市立病院精神科、96年琉球大学精神神経科、2009年琉球病院精神科部長、2010年副院長を経て2014年琉球病院長に就任。日本病院・地域精神医学会理事。

### 診療科

- ・一般精神科
- ・こども心療科
- ・物忘れ外来
- ・アルコール依存症等外来

### 病床数

416床

- ・精神科病棟 151床
- ・認知症 56床
- ・アルコール 54床
- ・児童思春期ユニット 4床
- ・重症心身障がい 90床
- ・医療観察法 37床



路線バス 那覇BS(下り)または名護BS(上り)より沖縄バス[77番名護東線]浜田バス停下車徒歩3分

自動車 那覇市から40分沖縄自動車道金武インターから名護向け5分

### お問い合わせ

時間 8:30 ~ 17:15  
(土・日・祝日以外)

TEL 098-968-2133(代)  
内線 231・234

### 地域医療連携室(直通)

TEL 098-968-3550  
FAX 098-968-7370

## 治療抵抗性精神疾患への医療

医師 木田 直也

## クロザピンの治療状況



2010年2月から治療抵抗性統合失調症の患者様に対してクロザピン(CLZ)治療を開始し、全症例は延べ298例になりました。2020年1月のCLZ導入は2例で、このうち1例は他の病院からご紹介をいただきました長期入院中の患者様でした。CLZ治療前には暴力行為や多飲水などの問題行動のために隔離や身体拘束が必要な患者様も多くいらっしゃいましたが、CLZ継続例では問題行動も少なくなり、隔離や身体拘束は解除できています。週に3回のCLZ専門外来も行っていますので、患者様のご紹介をお願いいたします。当院でのクロザピン治療や沖縄県での地域連携の実態については、ノバルティスファーマの医療関係者向けサイトDR' s Net (<https://drs-net.novartis.co.jp/dr/>)でも動画が公開されていますのでご参照ください。

## m-ECT (修正型電気けいれん療法) の治療状況

当院では、m-ECT (修正型電気けいれん療法)による治療を行っておりません。

## こども心療科

心理療法士 仲間 信也

こども心療科では、沖縄県より「子どもの心の診療ネットワーク事業」の委託を受け、子どもの心の健やかな育ちを支える支援体制整備に向けた取り組みを進めています。その取り組みの1つに離島支援があり、現在、宮古島、石垣島、久米島への支援を行っています。地域によって抱える課題や社会資源は異なるため、それぞれの地域のニーズに沿った形で事業展開できるよう、地元の支援者の意見をお伺いしながら検討を重ねています。今回は宮古島での取り組みを紹介いたします。これまで、個別に各支援機関と情報交換を行い、その中で活動を計画するという流れをとってきましたが、先方の担当者が変わればニーズが変わることや、取り組みの成果をどう評価するかといった計画性の面で課題がありました。その課題解決に向けて、今年度からは「宮古圏域自立支援連絡会議 療育・教育部会」の構成メンバーとして参加させて頂けることになりました。支援体制整備を検討する場に参加することで、地域の支援課題を効率的に収集でき、当事業を圏域での取り組みにどう位置づけるかについても地元の支援者と協働して検討することが可能になりました。今後も、限られた時間の中でより良い支援が提供できるよう、取り組みを工夫していけたらと考えています。

## 認知症医療

東Ⅲ病棟師長 宮城 尚子

当病棟では昨年より、認知症患者様へ外出支援を開始しています。目的を、「外出の中で社会と触れることにより、社会性の維持、回復、向上につなげる」としています。外出先は、ファストフード店から県立博物館と様々です。外出することで素晴らしい景色が見れたり、美味しい食事で気分のリフレッシュになり、素晴らしい笑顔のある時間になるのではないかと期待しています。「きれいな景色を見たり、美味しいものを食べても本人は覚えてないのでは?」との声も聞かれますが、確かにそのような方もいらっしゃいます。私は、たとえ認知症により記憶が残らないとしても、きれいな景色を見て感じた感動や、自身で買い物や会計を行い、味わうことのできた美味しさを感じる気持ちを大切にしたいと思います。認知症の症状により様々な事を忘れていく不安の中にもありますが、外出支援のひとつが、ご本人の心を落ち着かせられる時間となればと今後も活動を継続していきたいと思ひます。

## 重症心身障がい医療

療育指導室長 金城 安樹

2月、沖縄はプロ野球のキャンプ地として充実してきており多くのプロ野球チームが訪れます。2月13日(木)にグループ活動にて阪神タイガースの宜野座キャンプを観戦してまいりました。球場のある宜野座村は病院(金武町)のすぐ隣に位置しバスで10分程で到着。この日は夏日を越える晴天にも恵まれ、全国津々浦々から集まったタイガースファンの熱気も加わり球場内のボルテージを肌で感じる事ができました。当院ではより潤いのある生活を提供できるよう公園やショッピング、カラオケ、ボウリング等、多くの外出活動を行っています。現在はコロナウイルス感染拡大防止の為、制限が余儀なくされていますが今後も外出活動を楽しんで頂きたいと思ひます。

## アルコール・薬物依存医療

北Ⅰ病棟師長 長 祥子

先日、依存症対策の全国的な会議に参加させていただきました。依存症治療の基礎的な内容から各地の新しい取り組みなどについて講義や意見交換がありました。当院は、依存症の専門医療機関の指定を受けています。全国的に依存症の推計値は107万人といわれていますが5万人しか専門医療に繋がっていない現状があります。現在、繋がっている患者様の回復支援とともに、早期に繋がりがやすい治療環境の整備や重症化予防のための他医療機関や地域との連携を強化できるよう取り組んでいきたいと思ひます。

## 包括的地域精神医療

訪問看護師長 嘉手苅 美智留

桜の開花も終わり、若葉の緑が色鮮やかになってきました。寒さもすっかり和らぎ、春のおとずれでコスモスの花が畑一面に見られる季節となりました。訪問看護では日々の生活を注意深く観察する中で、現在できていること、支援が必要となるところを明らかにし、利用者様の良いところや出来ているところに着目し、自尊心を高めながら、一緒に考えていけるようにしています。1人単身で生活しながら、作業所に通っている方に逆に励まされたり、せっかく訪問に伺っても家の中に入れて頂けない場合もあり、遠くやんばるの路をがっかりしながら戻ってくるということもしばしば…。しかし、そんな利用者様が、窓越しにお薬を確認させてくれたり、ありがとうと笑顔で見送ってくれる時は帰りの足取りも軽くなり、目に映るやんばるの景色も更に新緑の芽吹きが輝いて見るとか。四季の移ろいを感じながら訪問看護スタッフも日々頑張っています。

## 臨床研究部活動状況

## 症例報告『森田療法が有効であった思春期の強迫性障害の2症例』

医師 原田 聡志

筆者は、森田療法が有効であった思春期の強迫性障害(2症例)を経験しました。症例は、迫害的な衝動観念から不安を強めた13歳男児の症例と、他者に迷惑をかけるのではないかと不安を感じ登校しぶりが強くなった12歳男児の症例です。両症例は、初回面接で森田機制により理解できると考えたため、森田神経質症を意識した病歴聴取を行い、治療を行いました。面接の中で、まず不安をしっかりと受容し、不安をなくそうとせずそのまましておくよう説明し、一方で学校での活動を行うこと(森田療法における作業)を指導しました。また、並行して家族の心理的不安を支える面接も行った。その結果、両症例共に速やかに治癒しました。児童思春期外来で神経症を診療する上で、森田機制を意識しながら診療することは治療上有効であると考えられました。

日本森田療法学会雑誌 29:139-146, 2018 抄録より抜粋